

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「劇のたまご『ぐりぐりグリム～シンデレラ』」事業

発達障がいを持つ子どもたちの豊かな感性や表現力が遺憾なく発揮された舞台美術に驚かされた劇の上演

共生社会の実現が急務とされているいま、障がい者との協働をミッションの一つに掲げる公益法人が、発達障がいを持つ子どもたちや一般の子どもたちと一緒に演劇の舞台をつくりあげた。福祉という枠に収まり切れない子どもたちのアートセンスが発揮された舞台美術に多くの観客から称賛の声が寄せられた。



公演したぐりぐりグリム～シンデレラ



健常児と障がいを持つ子どもたちが協働して舞台をつくる

インターネットネイティブな子どもたちが一緒に舞台美術を製作して劇を上演

演劇に特化した公益財団法人「北海道演劇財団」は、創造集団「札幌座」の運営と演劇公演の企画制作をはじめ、幅広い分野における創造活動や人材育成など創造環境の充実に努めるとともに、学校や福祉協議会、学童保育や地域のコミュニティセンターなどで、豊かな地域社会づくりのためのワークショップ事業を行っている。

同法人では2019年8月、AJOSCの助成を受け、発達障がいのある子どもたちが利用する札幌の児童デイサービス「ペンアート」、及び札幌市子どもの人形劇場こぐま座のパペットスクールで活動する児童をはじめとする札幌市内の小学生と協働で、札幌市民交流プラザのクリエイティブスタジオ(『札幌演劇シーズン2019-夏』の一環)、及び清田区民センターで公演する『ぐりぐりグリム～シンデレラ』

の舞台美術を製作し、上演した。

この事業は、障がいを持つ人の芸術・文化活動が単なる福祉活動の一環として福祉の世界だけで完結するのではなく、素晴らしい個性をもった創作者として評価されることにつなげ、社会に新しい芸術観・価値観を創出するとともに、共生社会の実現に向け、子どもたち、大人たちの意識改革につながる一歩になることを趣旨としたもので、発達障がいを持つ子どもたちに劇場と演劇表現という新たな体験を通じて自身の発見と社会とのつながりを築いてもらうこと、また健常児が障がいを持つ子どもたちと共通の課題に取り組むことで、障がいを持つ人々と社会で共生する意識を育むことを目的に実施された。今回の取り組みは、演出家の斎藤歩さんが偶然、ペンアートの展示を見て触発され、同法人が企画する『劇のたまご』シリーズの舞台美術を依頼したことからスタートしたものだという。

観劇に訪れた子どもたちを巻き込んでその日に使う小道具などを製作

舞台美術は具体的には大量の幟旗、書割り、お母さんの木などの大道具や、ザル、鍋、豆などの小道具を製作したが、特にクリエイティブスタジオは舞台面積が広いので、舞台美術や小道具を従来の3倍ほど多く製作する必要に迫られた。そこで同法人では、これをせっかくの機会ととらえ、開演前にペンアートの子供たちが指導する形で、観劇に来た未就学～小学生の児童や外国籍の子供たち、招待した特別養護施設の児童とともに舞台で使用するおかあさんの木の葉や豆などの小道具を作り、その日、その日の舞台を完成させることにしたという。

同法人の関係者は公演を振り返り、「子どもたちが着色

した舞台を最初に観た観客の多くが、劇場に入ってきて、『うわあ〜!』と思わず声を上げていました。特に親たちに連れられて劇場に恐る恐る入ってきた小さな子どもたちが、絵を見て興奮気味に舞台に駆け寄る姿が印象的でした。やはり子どもの感情や情緒に直接働きかける力を、ペンアートの子供たちの作品は持っているようです」と話す。

また、観客からのアンケートを集計すると、「子どもたちの絵画や、小道具に対する反響が多く、私たち専門家が考えてきた舞台美術よりもインパクトのある結果になっていたことに驚いています。障がいをもった子どもたちの作品とは思えない、自由な発想に目から鱗が落ちたといった声が多い」という。同法人では、今後も積極的に彼らとの協働を継続していくべきであると分析している。



観劇に訪れた子どもたちとその日に使う小道具などを製作



大成功に終わった札幌公演

助成団体:公益財団法人 北海道演劇財団

<http://www.h-paf.ne.jp/>



今後もさらに継続・進化していかなければならないと感じています

共生社会実現のための小さな一歩でしたが、反響の大きさに驚いています。始めたばかりで手探りのことも多く、ペンアートのスタッフのお力を借りながら何とか無事に終わることができました。子どもたちの笑顔が私たちの救いでした。公益法人としての私たちのミッションを改めて明確にしてくれた事業となり、この場を借りて御礼申し上げます。

公益財団法人 北海道演劇財団
理事長 秋山 孝二さん